羣書類從

三百八下

和書門 類 九五九五號 二〇四函 七架 六七〇冊

内閣文庫 和書 類 九五九五號 六七〇冊 二一四函 一八架

内閣文庫

番號	和	9595
冊數	670 (388)	
函號	214	39

群書類従巻第三百八下

検校保己一集

物語部二

大和物語下

延喜

先帝の御時にある御ざうしにきたなげなきわらはありけり御門みそかにめしてけりこれを人にもしらせたまはで時々めしけりさてのたまはせける

新勅恋三

あかでのみふればなるべしあはぬよもあふよも人をあはれとぞ思ふ

わらはかぎりなくめでたく思ひてまつ世たしとつゝしこらちにてはつかゝさ

見れくあかずまでおぼしてたれはおもひあへでもさはたち
しはらんのことましてかくらたれをもこのやうにて御息
所にさるとをいひて行ゑなくなりにけり

三条右大臣（定方）のむすめ堤の中納言（兼輔）にあひはじめ
給ひけるあひだはくゝろなけれども内の殿上をなんし
給ける女はあはんのこゝろやなかりけむこゝろもゆかず
なんいますかりける男も宮仕をしひし行くれて
えつねにもゆかざりけるころ女

新拾恋四
たきものゝくゆる心はありしかどひとりはたえてねられざりけ
返しは上手なればよかりけめどえきかねばかゝず

又堤とひごろをへてしくくてかんえまつりけるかくいそ
さい海の帝のおほくのみまもえまつりたまふ事となん
のみかしかさりけれ思ひたまふるとありけるほど
せけく物さう侍りけるは中かなるのうちの御ことにしきと
てさらにえあらんありければ
このあひだのみかどにいますかりけるを元良親王
のたまひわたりけるをいかでかみつけて時のまにみなれ
てさのみて斗ずりて御ことにかなはずにまかて女ことも
時なきものあらはぬ時もありけるをもしれずして斗たしける
うちにもいとしわきまゐりけるにこゝろざしのふかゝりけ

てあれ川にそ小さのいてゝさてめのとのゆくしへて
あはれかりとめて紀としてゐ地つとをかりけるを
あはれにのえくなさみまてゐにそ侍りれくさの
山ハ秋のかのし紀ゆかれゐさた侍りてハふける
こゑくしく地とひひたる人あるかとをよろゐてたと
せさえとのなやる

おほ千さた一
かくまをの庭の白州にうつされて志ら浜の忍ハくれけるの

あはし女

同
みくれふくほつの北下に築ハあてらいし杉をかゆのをまれ
あいやくし笑ひたる人ハさけなといとみしかゝやあるの

先帝の御時に兼香親王の御息所この御はこゝにありけり
平親王のきみとてと人さるとひたるをかれと右兵部
将殿かやの男にてくゝ心ちえてハうたを給ひ
なれこゝる源氏参内にいてらの紀有のまへんありける
らうのうちへにゆくして紀へとまちて持てうちて
むかしのきを見しけるふうころのさるの中納言にたる
りさのあめて紀めのひとめてくるかりを見しくまくては
二中将ならこの家とうとくいひ給ハさのけりと侍らる
女れとしもをとみてたてまつる事なれ

検千さ波ろ
人をとくはかれ川てはの国のあるへくさとハまこと

わすれにけるかくてこのもとのそれかやうにたまへりける
てたえはなりけるに承香殿のまへの松に雪の
ふりかゝりけるををりてかくなんきこえたてまつりける
拾遺恋四　まつ人へと松にかゝれる白雪のきえこそかへれあはぬおもひに
とてなんけめこの雪ある松にさしてたてまつりける
させたまひけるとなんきこえたまひける

故兵部卿の宮昇の大納言のむすめにすみ給ける
をたえてのちしより事となくありてかよひし
おもてきゝたまひてのちなむしのびてこれにこそ
うれへしことゝもかくてわすれたまひにけるにこそ

けしからずこれたまひけるをあのわたりにおはしましたりけるを
しにけりとはいまゝできりけるをとなむいひける事
故兵部卿の宮あひしりたまひけるに兵部卿のみこ
とはせたまひければかへりごと
兵部卿の宮いみじうおぼしけるをふたゝびとはせたまひし
けさあさけれは又
かたはらにいとおぼつかなしとてまかりつかうまつるとて
とありけるをおもひたまひて又宇治へまかりけるに
いくたびのをとこのかたへえおもひつゝ
これをきゝてかの宮のみやすんどころのもとに男ぞやりける

よりて侍ひける筆ねのくるかひやはらかれ掾とて
いなをなけれはむかしのもとにつくしよりの女
ともおそこそ行へまゐりける本ゐめしもていさゝか
らうたけなりけれはかくて此井とゝはをかしこひて
なふからにのこありけ（きイ）また縁者のねたうすんなるをまし
きゐたほくしれめきのひそおとこしたりもやきそしと
人のよりくれなれはよみそありける
おとこ出て月たよみとゝ車にのり侍りにけんいくよし
おのこと思ふらんかくおもふ侍すまてかれのかいてん人こそ
人あれは井とゝおもひいとそのをきかんあのかたよりとれと

さるはこれたかくしけりかくしおとこするあつきて此
おとこに思ひ更りまれとんしてそのこそ給ひめの
めそいてのこなるまかの侍そこの井とゝ女さし人の給
いつくるはうそふのそのくてかまてつるまてさりのおのかそ
かくむくれは女イ
むすめ見るかくしゆそれひくめのおとこのねか風のあけ
そとやらんひとかうくおとこもあつけりまそせ
こゝろ守りしたはおとこせしみすくいふかいかうおもふらんこ
男はたのしひやつかるんこのおとこゝれはうの
われしてゐ宰そのをとのそのもとにうきとゐん

めさしむすめてよそをたのみけるほとまてかくうちあり
あさましと思ふ人の中絶ぬるや人とあつかれと思ひなん
ものからそゝすきたるけかくそんなへてとかく
あつまりゐて夜もあけてそのかへりよかしくきこえ給
うけたまはれはいみしくこそはあはれなる御けしき
にあやしくかうつけまはいふさけるにおとさしむ
心からよそにられぬこそあめてあらむ見えの女の女
なむめつらしとふたりあひむすひ給ふはかへていくこと
をいとふかなしとおもひつる山さきよりこゝにいとき
てたんなむとみゆきなしと給ふきとも思ひ給ふやうなる

うみには後妻いたう前妻にひとひとひとはよそ給ひけるのとをたひとる
らひそはしめそ身にあるまねいては思ひことしのめは
あはれ給ふそく御心にかなはねとはれもかまへてそ
うれしとおもひへ給ふにいかなる事にて給はる人の子に
とすんめて思ふかくれはなりんまけるか
ふたりともこそれは涙のなかにひけるものかくと
給ふに給へはいかれてもかたへとものめしい
とかくしてあつまりとりものほとなくいてしにまかと
ゐ過事ともなく御は身なむのほくとみえて
えいつらは身よりつかへ人は車ともみえてそ

てをかし出てこしけれはあはれかくなかりけるをまたは
いとらいさくぬはなそみしとこそあれはいとかなしけれまて
かかり
故貞〔?〕の法師あるは桜かりにてふあまりはなたりけん
いとらうくしくまうてよまして行けるとくとしきたち
ゆやと行よりを海をまてたまてすましかふれなるまけるやの
思ひさんめくとやいうせ給ふ人の海とくくへれきにてうれ
ふみけまにたんなものかよはぬと思ひもあるまけいまさ
てよみ給ひける

古今雑下

そむくとてねかふ〔?〕かつれ〔?〕もの〔?〕しけり〔?〕のそよそにけり〔?〕

京の翁となんよき行かたさくされ武と桁送りまうて（楼イ）
かりかのをれ枝もおなしくれなゐのひとはまた思ひけるふかのせさ
しやまうをおくりけるいとよりいきそ坂しくいます
かくしけまた度なるえも心て坂かりの方これと返しすれ
せさりおも来女のいまの法のすみ来くそなくて給ふ
へとふくもあれ次と絶しのまくいとゝおもさまつてゆや
むかしまて母といひとれせあまりて、かくなんいひ声の
ある歌
思ふことかひなき恋にあさてつまこゝのおもひのみや
見ん年下坐かの恋ので嬉しといふこそけれ

かくいひけるにつかへしおやれし男ありきんとのひるへひかし
まふ折ところ露ところにとへしうれよりくるとし
侍ひたるはいひわたるとしゆくわとこもせて廿九そ
たまきくこすせのひ小わたる
むかし在中将（業平）のこむすこに在次（滋春）若しはふらめける人
ありなける女は出羽の中納言のむめにてをる家
のこと（御）すれいひけるわかきつしさみのはこらるの侍
繁みるとのめみそいつよ手あるけるかの母とにいたそ
かこのめしら（妾）わつよそありけるをこのめみせそうしを書
はいし君の世のひてとともよれえなけるかと我のこと

此きぬのこのわとこれとくかつらん又あ在中将
紀有常のけふいとおもふ女のもとより
（紀勅之西）三条れんと思ふくれあしきらぬもうかもぬ物ぞ給
此きすの人よきありけるにふてよいふはとことふたりのはね
ことれさう
もとの在次さい中将のあつされむとたりけるもを
やあらんこのことかへゑの心ふことひとうすん時し
われ人給ふさのそひとの國のあそわれにあつる
うし秋のくはうへみそかきつきれしかえんし
われせとつき此むまやとつあれは添ゑ子に紀有常

けるかれよりみそかに清けなりけるか
身のかけにやとらんあふさかの関こえむと
行きはしまとのさちしもつくはむやみて
いつくとはなくてそ秋のうち見ゆと言ひては
するに海をけりけるかしらみかくかよは清もすゝきるかく
て人のうちにあらさしてよひのくれていてそ
ところけるかへよ風よりしてしたみてそよりたり
名歌
ゆきてみれはそのひちときゝつゝ今はこされぬかくて
かへり京へまかるとある人よしうしてきゝまえ

さるほとにみなひとおりたちてなかめけ
るに人三河の国よりのほりてこれむかしやうち
にとりてこゝに住みしつ人そうはみ見たるなれは
みつゝあそひつゝいをゝくふかの
京にはみえぬとりなれは川尻に出て海にいるまゝに
ありしものともにゝたるあまたのうちにしる
ことはりのうちのひとなれは人みなこそ
ちあふさきにひさしひさしくなかき
ものゝうはなにか清かりしに清川
まてそ伴ら舟をはすなかつらかくてそあはれけり

濱千鳥ひゆくかきり有けれハ雲たつ山をあはとこそみれ
とよみたりけれハいといたうめて給ひて禄を
たまふ
命たに心にかなふ物ならハなにか別のかなしからまし
といふ哥もこのしろかよみたるなりけり
亭子のみかと鳥飼の院におはしましにけり例の
ことく御あそひありこのわたりのうかれめとも
あまたまいりてさふらふ中にこゑおもしろく
よしあるものハ侍りやととはせ給ふにうかれめはら
の申やう大江のたまふちかむすめと申もの

めつらしうまいりて侍ると申けれハ見せ給ふにさまかたちも
きよけなりけれハあはれかり給ひて上にめしあけ給ふ
そもそもまことかなととはせ給ふに鳥飼といふ題を
みな人々によませ給ひにけりおほせ給ふやう玉
淵ハいとらうありて哥なともよくよみきこの
鳥飼といふ題をよくつかうまつりたらんにしたかひて
まことの子とはおもほさんとおほせ給ひけり
うけ給はりてすなはち
あさみとりかひある春にあひぬれハ霞ならねと
たちのほりけりとよむ時にみかとのゝしりあはれかり

給て御しほたれ給ふ人々もよくゑひたるほとにて
ゑひなきいとになくす みかと御うちきひとかさねは
かまたまふありとある上達部みこたち
四位五位これに物ぬきてとらせさらん者は座
よりたちねとのたまひけれはかたはしより上
下みなかつけたれはかつきあまりてふた
まはかりつみてそおきたりけるかくて帰り給
ふとて南院の七郎君といふ人ありけりそれなん
このうかれめのすむあたりに家つくりてすむと
聞しめしてそれになんのたまひあつけけるかれか

申さんことはそうせよ院よりたまはせんもの
もかの七郎君かりつかはさんすへてかれにわひし
きめなみせそと仰られけれは常になんとふらひ
かへりみける
むかしはつの国に住ける女ありけりそれをよはふ男
二人なんありけるひとりはその国にすむ男姓はむはら（菟原）
になんありけるいまひとりは和泉国の人になん
ありける姓はちぬ（血沼）となんいひけるかくてその男
ともとしよはひかほかたち人のほとたゝおなし
はかりなんありけるこゝろさしのまさらんにこそはあ

さゝみたゝおもふよりもしけりてたゞおもひし事ども
来ぬる待ちて絶えにしかはかならぬ人のことをするは
あるおもひし事にあはすいつまでかへぬものを
へてもあらん女おもひもひとつしひぬ山人のこゝろさ
しれどもたゞわすれいつまでにもあらましけまでこれ
ゐにあまりても月かなとへて家のかはよまならでよみ何
ありなむとしとみえてまた其ほどをかねて待ちよりもかま
くるまにゐておもひし事になとすかなるのしもありり
ともいまだねなくなるにさらでそそのまゝおもやあるのそ
京へ乃人々に帰りて年月と経て人のなかけさ

をつくはしよおもへしてさとへひなるさへにあしひぶを
いふひとつまこのおもひの心ろもなんといひつゝ女君かね
さおもひもふ此人の心くしれおもへし事をわすれふかなん
わかれひとつのひおもふ所もいつすゑることもいふ事なり
さかみのそこいくさこの川の流れふ平張ふけまさとうちそ
おもふ所わがまたは其みよふひ人のいもとへひそやすむ
二中将やかいて事かたよりてもとてろ所しの歌に
事にかはりたるのわきまきみのかなんおもひもひとへ
らむかくにて侍る事いつふかまきみのことく侍るてめて
もあるにもおもふともかくいまはにふ人ますかゝる時に

あやしきものゝいふことをかきとゝめたるなしきまてもかはらぬ
いにしへのことをおもひいてゝなくよ
ならひあつめの中に紅梅と梅ほとつるやうにこの川
すへらきてさうつゝ梅おほきさいてこそ人にそれをといふそ
紀のつらゆきよりも時によりて絶たる紀の
やうにしてつる所にふひとりの頼しられたるは、残こ
今ひとりの君おのつるといふこといつまても伝わ
聞く君あしねよ女なるをひとりしてそ
伝きひぬさるとならてんきの国にいさゝの川は放生
是はのもこゝろみにさくせて見たれはかくふりつもりて

さてもはへありしをおもひにあゆねなとあのはまくるしき
なを志たまふ所にはまの男塚ともなりて思ひの
所よなれりのねたましり所をいとふひとり身を
ましとかくしておもふなり恋のときおやつにしくさら
されいつまであすめてあはれめの志ねすてよみて男
さるよのおもやことふなりこの女塚のかたはらに又川
かこちを織りそそのうつしさきにはかくこの思ひ
かたみれつるやうおもの所あのおもひを残をそおもし
ところはをめあてくのの人のいそその国まつら
とかくのすへきてなにてはるさくなる

いつこれをさのやわか本国のうちとはいまにたとし
なそこふにありてこそみえ給けるふ清真か
女ゆへすとの中にはさ左右ふみえおとこの外の思も
いさそなあふれゆゑめてのうきのしけれと給
すりみふかきて敷きてはいの温子の人の奉りた
る以ハさまてふくとみるふ人くこの太ふ奉りてよみける
伊勢の修息所男みこうみて
手けるのこ物よこそ寄ひれとむおとはいの中にわたりぬる
女にあそひ持て奥の均子ここや
かにかくいふつきつめた鐵むには地母人くてよみえ九女の

又家
いつこにかむとせしあれたふるとしのこれにもやふるよ
多陽乃命婦
河のかはきも流れにて契るらんあふ人よみなひうらし
以前乃治子内親王
かくうちてもかくしてやるを君か思ふ我れもいはぬをと
ゆきたりし程の女子かもてそ
春日のかけふくうめのをりよくのたちわたりてゆくそのかなよ
又哥のなき
男をかけてありしをかうちさかへぬに後はさふつふかへとなき川

又つゆもしられぬせとゝふみなりて
せかれつゝふかき思ひは嬉しきを中にかよはす我身のうちにくゝれぬらん
手ふれし女
うかりける我身の程をしらずしてかゝる契の中のうらめしきは
又ひとりまれせとゝふみなりて
ふたゝび恋ちのうきなかのしたふにすむは嬉しきを地はうきよの
さそは男はくれ竹のよふかき色をさかりてかりまし地ぬる海
えかりしせひなく浅ましそゆこゝやまなるひたらあて
いまそせうつけるひとつゝきとかのもの地にや
風あらんさもせひそみ月けるかの比の此まとはさま
先比のことゝひさしくあるたび人の比の此まかに風を
思たりけるふ人のいさかひすることの志け思ひはあや
しきと思ふえんをけまてゆることをきしと思ひ給ひたれは
何やらと地をもて給つのたるにかち侍るにそこなにさも
こ海つまこさそひさ海つきそて我かつみよせめてれさ
まひきて侍のれけるのしきかくして縁へらん給つ地
うんのいむかひし侍らんとつゝまに地にそへしとかまつ
わしその比めそ夢にやあらんと地りへてたらんそ
ましふさうゝせそ風のをそのさとゝのもけれはゆきつう
さかのてつきかつ取事をくしあのそまし父の男

こそいつらしきやつをなむひてうちころしさき
あのかたきころし侍りぬいまよりはなかき御まもりとなるへき
とてそのことのはしめよりかたるいとむくつけし
とおもへとめつらしきことなれはとひきく
ほとに夜もあけにけれは人もなしあしたにみれは
はかのもとにちなむなかれたりけるたちにもち
つきてなんありけるいとうとましくおほゆることの
なれと人のいひけるまゝなり
津の国のなにはのわたりに家してすむ人ありけり
あひしりて年ころすみけるに女もおとこもいとけすには

あらさりけれと年ころわたらひなともいとわろくなりて
家もこほれつかふ人なとも徳ある所にいきつゝ
たゝふたりすむあひたにさすかにけすにしあらねは
人にやとはれつかはれもせすいと
わひしかりけるまゝにおもひわひてふたりいひける
やうなほいとかくわひしくてはえあらしおとこはかくて
のみいますかめるをいつちもしらねと
いひし女も男もそれいつちへいかんともおもひ
さりけれはこのまゝにてはとてもかくても京
女はかくかうてあらんもいとをし

をとこ此京にのぼりてこやはなるなどとせてよろ
しきやしなともおもはれぬことゝもつく人にあはせ京
人のことゝもおもはれぬにあつくすたつねこつかれたまと
おもくいひ契て西よりの人にいひはなちて女の
京よりおくりけれ人いひこともなくてこれ
たゞめのはなさでし人のかよふみちくしてあつまりて
こゝろのさとりのにつよ[illegible]すかしてわかれにけり
わかれまよひける風ありてつきける西にあのはなのくふと
おもひみてこそいつもあらんなましかるしく中
よみける

狩して[illegible]をもあはれと思ひてそよとも京に[illegible]
すみなんとおもひけるはなくもつゝ女をすゝめて
ある人のおもへるをおもふことたゞく西のはなをや
はかなひしはかなくはしふ（装束）くをとかけ
むかしの地すおもと京におもひてあり[illegible]
ひけるかうへも[illegible]おもりはなまかまてこのはなの
国とこゝの時をもとの年にて[illegible]と[illegible]のけ[illegible]
たよりの人に文をもて西の宿の[illegible]のこの
人もまたおもひてこそかくおもひはなき[illegible]
おもはましく[illegible]さるにも[illegible]けまたんとも

こゝろかはすてゝおもひつゝゆくいつゝあるらんよのことゝひ
たかきみのかたへ誰にしるかたへすゞろなるかたの方
とほりてこれらのまへあなる人とめしつゝひさしくなりぬ
とゝまる中にこの人をとゞめむとおもひわたるにつけてもそ
めにあかのはかりおもひのこともおもひそめて恋けるにそのこ
ころしてまへ人の来まて此君の上にありけるつゝなみこゝろにまかせける
いつかそあらんあはれそやあはれなりけるやあはれ我
あはれとも思ひまかせぬ人のこともおもひそめてたえてとあらん
とすまてさまあてゝ恋のはしてみそてうらみそあるなるを
わかれてこそあはれとおもひしにあはれやさしくよる事を

あつまにおはしける男は伊勢の国に
とまりける人にいひおこせける伊勢のそたまふ人に
いひそし伊勢のくにまでむかへにまかりて我に
なとおもはむかたれとそとはかなくなりしたなる人とひと
のまへひとの伊勢のくにとうかひてまいりてたちそていかなる
あはれとおはしてかへりまかりてひきかへしおもひなまし
まゐりにけるつまとなる事をしてもかくてそはなれてこそ
こゝやまへかくてそれはなれたるゆへとやらせ侍りて
まかれあはせやうしてみえ給ふとき恋しき人にはなれ
いつもおもへとおもひそめてひきかへるかたへ

さえ人あて姫のへいらされたりとあいなんはいまうしおもふすさまも
れいのまゐりたまふ孫王とはつらいかくもれいてあれ
また帝は人の御心だにてもれうのむらさきまで見えし女の
むくれ姫のへいそれなるさうかしかいしとかぬ
またしらえおもふいはしのうすも人を御心知らぬにつけるのかなる
ものやかにおもすくみすることのくらまたむへかりつき乞児
みかきこまでのかひの御はかなきみそなかりつくろひしもあり
すいかしけ御にかえりて申すはしめとしかたりにけれと
まえてかくへひしきかしとふかのあつしきらたるとて
こよひとかくあしかなんとかの御かたのかえりけまてよ

うれしさまのかなひ給ひしとたまへれとこそいけくあさまし
それなるはよひてたつね車にのせてけくかくなる
むすめさうふのうつよりかへしけれとはいえてこの男は女と
よくおもふなれはかなしくもはかなくまいてあはれまよはぬ
このあるさへむかしはまよふ姫さるへいふかれんとひ
女御かきなれいはもなきあまりにまこととも思ひこのよ
とをかしなるへき思ひたまふてこの給ひし此男にも
のなくしくもそよ御はしむかへにかはらいとかへにかいを
せましといひたれはすくれなるのふたみの女の
むかしく様めんもしあるへくいひけれはたつねてし

見つゝひさしくゐて物をとらせんと思ふ男ありけり
してさし出たれと御のあとをたつねよりくる男ま
られはやのめふたゝびいやしさふんとさめてまゐる
小まかりに二条をそれ右のかたとかふよれともしあはい
をそやうも御のいとつゝふく泳する代地のなかいつる
まへりしてはしさめくてあしをうらすそくたかまし
かけよたり志のしといふをけまてゝ人の歌よにを
入てかの御の志りつふかうよう地のけるとこの車より
たるにの地ところ〇てみそてしとひかくれいさも
の人まてあつちてものめはつさゝその人をこぬる

歌よみなんなけるとこ人も地とふかくおもひをこの
あつまてもちとおりたるふのうちひゝも紛つゝとまとも
はつすきのとこその絶のきんとすまと地とれをさも
のたまふゝみよりふ硯をもらひかくかくこれは
拾遺雑下
うちていけりて思ふもにしるふいの酒そすいし池
封
こかきて御もして御と車にまれこうひとたまて
ほやし申ひそてをそこそてなるあなそてよ御り
かのしうすのあやんよしき乳よよりたえてかう
しいつしするうらんしつすくゝさにさくりけるゑ
ぬりをてはくみそてかをみましかさくて風のけるさそ

なみをかへりみるのちにはいつれのにかゝん志のうす

拾雑下
あしからしとてこそ（よからんとてそ 拾遺集）人のわかれけめなにか難波の浦はすみうき（久ん集）

昔や難波のわたりにかよひける男女ありけり
この女をわかれてのちさまく我身にかはりて
たくひすむまこの女いまはわかれゝは我すみ
わひてくかなりしわかれはひとりさめてなけきて
まさ今乃めのとこたる女を我かありけるこれかれ
の紀をいそはしみてこりて男はさらてく思ひて
こさうくにもかせのかくかへとくし都とみふ
なかひとりは紀せみ女いてとゐけふそへかく

わか小にけるとはたにも紀てゆけるなかれてあまた
にはあつまて思ひの人をもかへりみく紀なく
心うくおもひてをと思ひつゝにけりけるあのふん
ともりのゆかさをなけてかのかなれはかくあるよ
けるなわれさまてこひさけのふやあかんを渡さ
させひとうくもの事をもまうんれくにのうらり
おもひのわけくいてはくこみ思ひせんさむ
井にかくまてみやくるとすまはなくにいかの中
あそ月のいて見のおもひ路えくにまつらひい
なみまわりしてふりを横なく雨まて紀とはや

いといたううちなけきてなかめけれハ人まつなめり
と見るにつかふ人のまへなりけるにいひける（古今雑行）
風ふけハ沖つ白浪たつた山夜半にや君かひとりこゆらん
とよみけれハわかうへを思ふなりけりと思ふにいとかなしう
なりぬこの今のめの家ハたつた山こえて
いく（ゆく）道になんありけるかくてなほ見をりけれ
ハこの女うちなきてふしてかなまり（金椀）に水を入れ
てむねになんすゑたりけるあやしいかにするにか
あらんとてなほ見るされハこの水あつゆにたきりぬ
れハゆふてつ又水をいる見るに
いとかなしくてはしりいてゝいかなる心ちし
たまへハかくはしたまふそといひてかきいたきて
なんねにけるかくてほかへもさらにいかて
つとゐにけりかくて月日おほくへて思ひやる
やうつれなきかほなれと女の思ふこといと
いみしき事なりけるをかくいかぬをいかに思ふ
らんと思ひいてゝありし女のかりいきたりけり
ひさしくいかさりけれハつゝましくてそ
たてりけるさてかいまめハ（かひまめは）われにハよくて見
えしかといとあやしきさまなるきぬをきて

貴くおもふべしと法にはしかもそゆる
まつりごとを正しくとりけがすべからず心しもとなひ
天地ふ久しきはこの代国にも恵み出男はおもふべき
みなひのけしき
昔より代々の文武ふ法々の善を宗として人ありさの
すなはち代々よりしかして法をもちて人にもおもふ者と
人あまたもちふ名けれとあの世もの恵みのあまた
なはみちてとくかさなりくめてたくさんのふしぎおほひ
まつけ名流門めしてもの法を後みてなほ絶えてく
まなる近くあるよりおくなりしてものもひまゐらる

ひとへに仏のまへにおもひて法門にこもりしくまゐり
く行ひて法の流門にめしいりて業をもおもひ
まことの法の中にて見え来れる世にふ
おもひ地にしたれはなお代々はよりて法るさい
の池よりとたすけてなりたまへりてあけつきたる流門まで
あまたりめさてまさ世の法をうてくおもの
てくへのそしられは地にもめしてたりにけれ
たまへあきた道てなほ法て池のさりに思ひとせ
しほくへにて低頭よ南をたすくふのみのかと
の人也

拾哀
わきもこかねくたれ髪を猿沢の池の玉藻とみる
そかなしき とよめる時に御門
さるさはの池もつらしなわきも子かたまもかつかは
水そひなまし とよみ給ひけり さてこの池
のほとりにはかせさせ給ひてなんかへらせ
おはしましけるとなん
おなしみかと竜田川のもみちいとおもしろき
を御らんしける日人まろ
古秋下 拾冬
竜田川紅葉なかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし
御門
古秋下
竜田川もみちみたれてなかるめりわたらは錦中や絶なん
とそあそはしたりける
おなしみかとかりいとかしこくこのみ給ひけりみちの
くにいはてのこほりより奉れる御鷹よになくか
しこかりけれはになうおほして御手鷹にし給ひけり
その名をはいはてとなんつけ給へりけるそれを
かのみちに心ありてあつかりつかうまつりける
大納言にあつけ給へりけるよるひるこれ
をあつかりてとりかひ給ふほとにいかゝし給ひ
けんそらし給てけり心きもをまとはしてもとむる

ナし小屋見て山にて人を恋ひけるとき
後に清なりて侍らずなりてしのびける所に
入て侍りしあひだにほかへうつりて侍りける
うせて志のゝ歳ある人まかりぬと二三日に又あけぼの
はらんせぬ日なりしつゝせんと御ふまでの中
御魂をうせたるよしときゝし程に見えて物も
さるゝつきはさゝ出し給へしつきぬまやあらんとて
まうでこし給ふにおきてとみにをそそきを給ひて
物もはうじやうと書きて人に示し奉りて
と我よ世あるなりしにしとまりてつき給ふ

てこゝの給ひそれがしゆるに侍りぬるつゝ面あらし
侍るん前よりの御ことゝも志侍るねべし侍る思
ありみんと

六條院
ゆきそ申さふそつゆふせよいふ
菅原後行句
しのびさへとかくのをみてしよりをてあること
とふこゝははさまの法にてもひかくおほ
くれてゆくかなるけり世中の
人にとくとかくつけてあるかくゆきを
あけるに
平城
けれみのと給ふにかくし御めぐみ時よりのゆきとのこ

春坊におはしましてよみて奉れ給ける
皆人のその香にめづる藤袴君のみためと手折つるけふ
みかど御返し
折人の心にかよふ藤袴むべ色ことに匂ひけるかな
やまとの国なりける人のむすめいときよらにて
ありけるを京よりきたりける男のかいま見て
見けるにいとをかしげなりければぬすみてかき
いだきて馬にうちのせて逃ていにけりいとあさ
ましうおそろしう思ひけり日くれて竜田山に
やどりぬ草の中にあふり（障泥）をときしきて女を

いだきてふせり女おそろしと思ふことかぎりなし
わびしと思ひて男の物いへどいらへもせで
なきければ男
たがみそぎゆふつけ鳥か唐衣たつたの山にをりはへて鳴
女かへし
竜田川岩根をさして行水のゆくへもしらぬ我ごとやなく
とよみて死にけりいとあさましうて男いだき
もちてなきける
むかし大納言のむすめいとうつくしうてもち
給ひたりけるを帝にたてまつらんとてかしづき

おもふとなくよはりはてゝ海清のなかにとゝまりけるに
みやこにありける人いつしか見んとおもひしむすめを見
弟ありけるがいかにしてかこの年月を経てありけるをとて
よろつ川のことわりしれる人を見まかりてくたりけるに
まつりしくるしき旅路をしのひてありくなれはおもはれしに
さらに見そ次第つきさき東海道をもくたりつゝひとりのけ
尾張はあやしくなまめいたるに伊勢にて生まれけるに
情ふかくもしらしてなれくとはいへともかなしくかなしけれは
てならひのをこのみみちのくの人にまかりいにしへも
思ひもよらぬにてそいふなる人のありかのあさ

かの山よりいつかの宇治川くたりてこれをかくとすへ
二年程の小出にかくれてかくてさしくてそまつりおもひ
年月を経てまよひありけれ出家のまゝ度をあて(?)
里にてもくらしてくらし山中にありしかは名をかくし
しかれとものちにくるしきよしをもなりける男
京のかたはらに出てならくまいて三回忌にはあらたにこの
御ためにとて出で心の井にいてそかけのちを二たひ
まことのなとしかしたはれあらすはやみもなき
我身にくるしみをもありけれともいかなくそのなき
人をもとかへりてそなけきのまになかのよし我の度々(?)

おそろしけなりけるをいとはつかしと思ひけり
さてよみたりける
　あさか山かけさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは
とよみて木にかきつけていほりにきてしにけり男もの
なともとめてもてきてしにてふせりけれはいとあさ
ましかりけり山の井なりける歌
をみてかへりてこれをおもひしにゝかたはらにふ
せりてしにけり世のふることになむありける
信濃国さらしなといふ所に男すみけりわかき
ときおやしにけれはをはなむおやのことくにわかく
よりあひそひてあるにこのめの心いと心うき
ことおほくてこのしうとめのおいかゝまりてゐたるを
つねににくみつゝ男にもこのをはの御心のさかなく
あしきことをいひきかせけれはむかしのこと
くにもあらすおろかなることおほくこのをはのためにな
りゆきけりこのをはいといたうおいてふたへにて
ゐたりこれを猶このよめところせかりて今まて
しなぬことゝおもひてよからぬことをいひつゝもて
いましてふかき山にすてたうひてよとのみ
せめけれはせめられわひてさしてんとおもひなりぬ月の

あかき夜おうなともいさたまへ寺にたうとき
わさすなるみせたてまつらんといひけれはかきりなく
よろこひておはれにけりたかき山のふもとに
すみけれはその山にはるはるといりてたかき山の峯
のおりくへくもあらぬにおきてにけてきぬやゝ
といへといらへもせてにけて家にきておもひをる
にいひはらたてけるおりははらたちてかくしつれと
年ころおやのことやしなひつゝあひそひにけれは
いとかなしくおほえけりこの山のうへ
より月もいとかきりなくあかくていてたるを

なかめて夜ひとよいもねられすかなしくおほえ
けれはかくよみたりける
古雑上
我心なくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月を見て
とよみてなんまたいきてむかへもてきにけるそれよ
りのちなんをはすて山といひけるなくさめかたし
とはこれかよしになんありける
下野国に男女住わたりけり年ころ住けるほとに
男めをまうけて心かはりてこの家にありける物
ともを今のめのかりかきはらひもてはこひゆく
心うしとおもへとなをまかせて見けりちりはかり

ちりのものとゞめずみなもていぬたゞのこりたる
物ハ馬ふねのみなんありけるそれをこの男の
従者(ずさ)まかぢといひける童をつかひけるして
此ふねをさへとりにおこせたりこの童に女の
いひけるきむぢも今はこゝにみえじかしなど
いひけれハなどてかさふらはざらんぬしおはせずとも
さふらひなんなどいひてたてり女ぬしにせうそこ
きこえば申てんやふみハよにみ給ハじたゞ
ことはにて申せよといひけれハいとよく申て
んといひけれハかくいひける

ふねもいぬまかぢもみえじけふよりはうき世の中を
いかでわたらんと申せといひけれハ男にいひけれハ
物かきふるひいにし男なんしかなから
はこひかへしてもとのごとくあからめも
せてそひゐにけり

大和国に男女ありけり年月かぎりなく思ひて
すみけるをいかゞしけん女をえてけりなほ
あかず此家にゐて来て壁をへだてゝ
すゑてわがかたにはさらによりこずいとうしと
おもへどさらにいひもねたまず秋の夜のながきに

ありけり絶て出でしてこのあけは志つる物なき世の中
にまのもいひて思ひ定めりけんと色々そてつる
おとこ思ひ給ひやかし女は心得ずなり度何事
心つくへけまてきのまつる時すく給へやとし
ある時は憂さくゆらこいへなりなこ所てされ
とはいひけれはかくまいまで伊勢ら
事あり
我も思ふ絶て恋人不忘今こそと思ひけり
思ふとのこ思ひけるとみ曲りけるは思ひ給ふ
めてしこ此いその女とをくりて思ひのこゝろん

すこしわすれける
猶絶えのく由縁にいひかはしまきかゝれとは
忘れ給ひしやけるわれ思ひくすと絶ゆる給ひ拾遺と
かくし給ふれはれそ心とをとすんあつきをも給ひけ
ふうりあやはうもと思ひく何ありしたのまれは雲
多る此ちんのあやさをや思ひむへきとはえ君
しと思ひ、かくものにしかはもおほ思ふ給ひつゝ
谷つるあは給ひめうけ給ひつらんとやなまりまれた
給ひし御返しなり
後撰恋四
雲心の此纔の色とも給ひを知人とあひこそ中

季は西ゆま度とかはせさまへりける
おなし内侍にて左中将すみける時中将のもと
よりよみて遣はしける
後撰 枕よりまたしる人もなし
枕くさ浅きもる風のたよりに人のもらさんかつは思
ひあへすけまし度返し
日本紀竟宴第八
嬉のことのふる風はいかなれはいまの業平かね
ことすんにふりけるまくてもあすなりて後中ね
のもとよりつねとかくれ志ふかきことを御のけるそれ
りあひもそひもて後の人なくそはくりひしくなん
はふななかわすしてたまへうすんまけ返して
内侍になりてあるころにうせにけるなれし
大ねきとなりぬる人の喪にこもりつくをまちさて
なくなるとなんいひ返しまかりけるに中ね
なすの浜のつとは何とかみえん我はなりてさらん人のな
ねさとなりなんなるみ侍りけるに
右中将二条のきさいのまたみやすところにまうて
うたつき行りてたて人小松のしけりあふ
ところをまりける時かしこまりて物をとらせてこの
くれん
伊勢物語
思ひあまりむくつけき風に小松をすなへひしきその母

え忍とし侍てしこなんきこえさせける返しを

人なんありけるに二条のきさいのみや春宮の

女御と申しけるとき大原野にまうて給ひけれは

に上達部殿上人いとおほくつかうまつり

給へり左中将もつかうまつれり御車のあたりに

なまくらき折に立てりけりみやしろにて大

かたの人々禄給はりて後なりけれは御車

のしりより奉れる御ひとへの御衣をかつけ

させ給へりける左中将給はるまゝに

古雑上

大原やをしほの山もけふこそは神代のこともおもひいつらめ

とて心にもかなしとやおもひけむいかゝ

おもひけむしらすかし

又左中将内にさふらふにみやすところの御かたよ

りわすれ草をなんこれは何とかいふとて給はりけれは

中将

續古恋四

忘草おふる野へとはみるらめとこはしのふなり

のちもたのまむとなんありける同し草を忍ふ

くさとも忘草ともいへはそれによりてなんよみ

けるなり

左中将ねふこき川のこやまよりかさくめしかれと

さてまたありける川のくてり
古今秋下
うへしうゑは秋なき時やさかさらん花こそちらめ
ねさへかれめやとかいつけてたてまつりける
在中将のもとに人のかさりちまきをおこせ
たりし返しにかくいひやりける
あやめかり君は沼にそまとひける我は野にいてゝかるそ
わひしきとてきしをなんやりける
水尾のみかと清和の時左大弁のむすめ弁の御息所の
こやとてそいますかりけるをみかと
おりゐ給て後にひとりいますかりけるを在中将
しのひてかよひける中将やまひいとおもく
してわつらひけるをもとのめともゝあれは
これはしのひてあるにもあらねはえまいらすも
ことつてなと給ひけるのひにあすなんとふらひける
のひにありしもいまはかゝるね日なんを
もろやまひもいとよはくなりてその日よなかり
中将のもとより
つれ／＼といとゝ心のわひしきに今日はとはすてくらし
てんやとてをこせたりよはくなりにたるとて
いといたくなきさはきて返事なともせんと

はるかに心ほそくおもひていとゝこゝろしかりけり
りさらんとするところにいひおこせたりけるよみてやりける
むかしおとこ
古羇 はるかなる道とはかねてしりしかとかくはかりとはおもはさりけり
とよめりけれはとみにもえいかてかへしもせすしありけれは
よみてやりけるとそいひける女かへしあるくは人のもとに
よりたちぬるかはさこのよをはりの國よりいまははや女の
かくておもひなかりけるにおもひよりはへりたるいとかしこかりし
せめていふうたに女のかへしたりけれはかへしのそうりまもなく
そてぬれておもひけるかな

古恋 みすもあらすみもせぬ人の恋しくはあやなくけふや
なかめくらさむとあれは女かへし
見もみすもたれとしりてか恋らるゝおほつかなさの
けふのなかめやとそいひけるこれを
恋のうたにくはふあることにそのいひけれは
かくて女のことをとりいてゝそのいひの
いまそてゆふ人になりてのさねとこおもひて
返しとこ次ともそれにとさしけり事もとく
かくてなにすへの國よりこゝにまかりてける
ともれわかゆきしかは女にかくいへる

見けれ
いとやさしく人よきなりかり衣ぬはせにてまいらす
もの忘れしく
ふかくさのみかとゝ申ける御時良少将といふ人
いみしきときにてなんありけるいろこのみになむ
ありける志のひて時ゝあひける女おなし内
にありけりこよひかならすあはんとちきり
たるよありけり女いたうけさうしてまち
けるにおともせすめをさましてよやふけぬらんとおも
ふにとき申すこゑのしけれはきくにうしと申しける

と申けるをきゝておとこのもとにたゝかくいひやり
ける
人心うしみついまはたのましよ
といひやりたりけるにおとろきて
夢にみゆやとねそすきにける
とそつけてやりけるしはしとおもひてうち
やすみけるほとにねすくしにけるになんありける
かくて世にもいみしくおほえてつかう
まつるみかとかくれさせ給ひぬれはあるかとふ
かのみかとのうせ給ひしよりのとも

みなくへつゝ海河のほけるなかにそぬよるまいらせ
おねらうせふかりゐをたちもやとつのあかんせ
ありしふきかつとさとむまでもやとみなにも
こゝろすかなしにやれのにくんあとやおけ
てたんほとしにまのそをゐさそおんあつまもさ
せうへおんな代のとうけたるれるへしをおもふ
おもの中にもみして大あの道とまめこことは
時にもいくとよつ去来さしいなるとも世間
のかにかけなくもんとそそまへとともとも
一さおかとめにこゝへ身むなけるとよろしくさい

なるにきな代をふかへしとおん思ふてこそのふ
そうひかりゝせうのもおくなりひて子わくある
紙かはらまかるも法のゆか地をまん色さり
まつかせ上代をもてもいよく女もいそしとをふ
西く紙も車かくなる海へきんらおと生ほ道
そよりたふこそにいふかなんうせふけるかもる
くもなれあく初れ共ゑのもいくさまけるこそ
のいさし地と代わらひいてある地つまそて
おの流てにたのめ海うそにゐのをかれの法師
りなのてこれひかうとうらさそせてん其故

とりひあつまりてとくさきれは寺にわかはらはなれ
まけるほとりにかねてわ人は此女条術に子
我か此人ハかくれくなりにけりといふを世よりなめ
なり今ていふ塗みを持へ身とおもけれとたる物
わたくしこもなくはなしかへもそれ死にたるもまたの
人のあるんやとと是たはくもうつはくくもちて
みをたてゝひそか装束はらそとかくしても帯を
太刀らやそとふす誦こ経やうにはかうくみそや
無ならはなをさけれはしかは行人へのまうして
人ありあらんとすもなかなをやまわのくへとあくなかに

川のほとりにくるに綾ぬひくすなやかにすなるとて
みなみをきてあれくかうのしてこの物ありはなして
みやうてかよしとありとひとかつれて思ひたし
ならひかなしかて極ひてよなかむありしてほ
さきにこれはこのも行にも渡りかうてさかれあはしの
渡りてなんまけるいさうけいちかなきこと
ひとの物ハまとのみなんあるまけなくて伊勢け行
きの行つまれくしすもいそねへきことなせしとて
後にいかなる行にとかく綾にむかて渡はしてにあ
まてもあゆく服ぬき脱にまつ川のみなと人こかりあ

あるふかくハのことやうなるなん有しかふかうのそま
又として後なるはちれらしけれと
古来時人ハ都の前に衆ぬるの昔は彼よいかなる後にかま
世あるか重度むの言にる物のまにことなりけハいふこと
ゆゑにて見てなし人とせいはふもと道ことなりけ
時ふなんすよい事しさ度む道にくなんとなん人
ものにまたれとはることわるあるそ世とも今とゆる
なし通しに次かくて世中にあのけるにあなれとを
ちなしいなし衆際のきたハのことやうなるね
かゝとなるかにて山ことなるのと時に所をりに

ありしものにてはけふにもぬかしこふあるにさきても
まて何事道ハ又らせぬ見あらすかられしてまく道
あるも所なゆくのもと物くいにてか遠かるはあん
そのかふの言ぬの使ふなん系のさしのる
ころ中おかもしてやかなるもかりしさん
もつましく拙かしめしゝ人とかなみとるへき
りしかく其ふう移ハかくまし語のやくま度いなん
ふあるし抜なるも山やしふもゝなん語しもちて
にかゝにせうきことを時にすくぬ抜かん杯しく
し所のもとゝも志語ハなるまし度いなん義おなん

おそろしき海ちのあるに所にてかへりはあめし給
らせ給ひしはそこよりそれなん給ひて道おはしましと
見給ふなりてたひんたいまはしつるといへるかれ大臣
うらにてる給ふとしてこ御のそうけ給のまぬこ
かくてふくま道給てかくこれのもとふたりひて此く
しるさぬあつらふありしもはのまへきこころもし
侍りけるしかくかつ山のすゑよりの侍り事
ありんどこ期かそとおもふ給ひるくとやうこ給んなく
あやしたゝのはいはさくとなくひ侍るいてもなくこ
くとりせ給へつ給ふさくのへ侍るとは給ひにおほゆ

侍る時をはしまさねとも
古歌引
深草の北の井のわたりにおなし程も人をとふらひやう
堂あるのほとりにてかりし給ひていひたる堂のかた
かねてみ給ひとそかの御ふかみしきことを侍りと
それ人よりあやしきのにくにおいてたゝこのくも
内をおんきたりけるかねそなくし時りき御おな
いて此たけなるましとおもひ出て御しこ内にや見え
そのかみしとてもかくは人の内へともあるね
山のおくはのれいおもく侍りとつきて御かく
て此大とくいそかはいそあり侍るよしとかかたか

くたりけり件いともと覚宰りきこはいのうちもいとをかしき
うねさ給へさらねひん人ともいひけれとあはれにおほえ
けりやまけるかうちの御返事人々あはせてこそいへ
いひはなちて又まゐらすれはあはれともおもひ文かく
なま事になりぬ
をのこまちといふ人正月にきよ水にまうて
けりおこなひなとしてきくにあやしうた
ふときほうしのこゑにてときやう讀經したらにはよむ
むこのをのこまちあやしかりてつれなきやうにて
うにて人をやりてみせけれはみのひとつをき
るほうしのこしにひうちけなとゆひつけたるなん
すみにゐたるといひけりかくてなほきくにこゑいとた
ふとくめてたうきこゆれはたゝなる人にはあ
らしもし少将大とくにやあらんとおもひ
にけりいかゝいふとてこの御寺になん侍るいと
さむきに御そひとつしはしかしたまへとて
後撰雑三
いはのうへにたひねをすれはいとさむし苔の衣を
われにかさなんといひやりたりける返ことに
日工
よをそむく苔の衣はたゝひとへかさねはうとしいさ
ふたりねんといふにさらに少将なりけりと

略しとひて世にはかくこそいひし中将のけまでにあ
あそく物をいくいんとおほくつくしたれはかいまめやう
にうをふかのひとしてくとおもめさるまてはつるふ
ゆけてらせふかりかくそてうをふかるたまく成き
僧正まて成て花山といふ所に寺建のひろく
俗にいまた在りける時の子ともあまたの素性文
左近将監にて殿上しても猶けるかくありしにや守
おのとおく時世にとも中毎をも敷りたれさき
そうりけまてあぶくしみ子の法師そうそて人絶と
てあまりはもはらしにしてのありかくてあすん

かつまたにたゝおけり数あてかうみおなかりけり
よみたてまつるにたゝかれそうてやうれけるにはなれ
あつまけるかつ子とこしおしたうひとむねはくらんは
かもはへしてあかりのあまもけれと殿ぬやうるもとにそ京に
京にかへりてされなほありける親のかうのたとくのし
そく成ることは人のむすめのさらに書るんとそこつ
しはるさけるかとみそかぶにのうひてなりわや
やつもりて男ともと女はもすむをおくいこうらひ
てまのたとくとよせけるりかなれい山よ房うらして
みそこうよのかうひも見をはりも使にしくまへしう

あまりて此さいつまてし女のせうともなと非ん
人のよさしに山よみかりあそひたまふこのおとこの
もとむかしこふこそ京のかたもなくしてうちや
すみたりけるふしきぬのきぬにつかへけは
白やとみ尾よる峯のそとくしあまり思ひのゆふあり世蔵より
こかきたりけるとせしとの長者のせしはえまうして
京へいぬいかうしと見えけれともあはまてよやとひかえこれ
く徳都よ知て京極のみやすところにたてまつれ
まりうまし
むかしうら相りかりけるへおかりのみそくる 大三輪

使にやまとのくにゝまかりけるに井手といふわたり
りきよけなる人の家より女ともわらはへおほく出て
此いく人を見るきたなけなき女いとをかしけなる
子をいたきてかとのもとにたてりこのちこのかほの
いとをかしけなりけれは目をとゝめてそのちこゝちゐてこ
といひけれは此女よりきたりちかくて見るにいと
をかしけなりけれはゆめこと男し給ふなわれに
あひ給へおほきになり給はんほとにまいりこん
といひてこれをかたみにし給へとて帯をときて
とらせけりさてこの子のむすひたる帯をときてとりて

とかくやりてまうけるかむこれひをゆるしてをかしき
おほかたはとし六七ばかりにやありけむその男かくこれ
こをまうけける人おほきなるかほよけなるまうけるまうと此
まへに逢ひ給ひしかばいかにも男はよくやうに又まうて
ありけりかくて七八年ばかりありて又かくの流
うちにわたりてかくやまとへいくとて井手のもとに
ゆきにおとりてあそびてこれはまへの井手のみまさけるに
それよりまもりしかどもあなかにも又ならし
こまをひきわたしたりける中納言のもとの紀朝臣
新古今家の別當大臣とひとつれは待つにまつりけれ

またおほいまうちぎみ（御達）ひとひおなじかりその恵みによりまう
左中納言源ノ朝臣風になびくあなかま給ひて中やうに
給ひたりけるに又ひとりの酒よりかれなるとて詞し
て兵衛の命婦なんやまと給ひたりけるのかへりごと
かくいひとうたよみ給へることとあまた海しう
よみけるもいたくこその花なれば君をあはれとこそ申
東宮のいとかなしう春風の吹けばこそ散りぬ
かくあまたたびやうたの歌婦にあらし
いとめでたき風のやうなるひとくへききはめてしもいやして
いと花盛のおもしかれにきこえし給ふに時（致慶）あはれ
（清慎公）

家にてのふまゐりけるまゝの家にやまとはいふ人のもとに
らひけれと此のみかとにまゐりしかは伊勢のかたりけるか
まへにゐなかのむ人みえて女いと口をしくおもひてたゝしとこひ
もりけるとてゐのゝひにあそひのうたこそりけるやまとに
佐渡守と
人のまへなるのみちにほひ大宰帥もたくそくたまはり
こそすけたるよひの風のけはひもたかき人し
日
ひくらしの聲はおもひもえの紙にかきつけ心ほそくや
さあつまくたりかくてえしく来り給ひおもひ給ひる
女いとゆかしく思ひやりむかしのかたりのいらしけるか
らはかなやまさりける人もおもひてそのおもひより

て月に来にけり左衛門のかみなくなりて後もたえて
あやしき人とよみをそへてかねの君の
御こゑんとひとつれはあやしきことかなと思ひて
笛ゆかし人のかくいはするにいひたしけるをすなはち
てかりねよりやまとはおもひしことゝいひけるとか
いふやうにおもしろきやかれそる御こゑんおもと
いひてかけたる人もあはすまつのこゑ聞て
御声のいつりけるほどこそよるかたれはあやしと
おもひてこそまことけるかねのもとやまかりけれ
ともひたりおほしたまふとひかれはいとあさらに

きこえさせ給へることゝもにて有ける人なんは
いりたるこはしに思ふ給へてまゐりけるはいとやさしき
ことなりきと思ふはしきさふらふ人
とは見え給へまうしやうにあそびけるに
人とくわかれてのちの行幸につきて今は
えうしかまけてもとおはずさりなむからく
しても思ひつゝそ庭てわれつゝ御よ
ぜんと思ひにふなんそこさたりけれはく
伊勢やまよく人に心あるかれてきこえけ
とからつまそうれはしきこえつ思ひ御ことにしたま

あるいは玉やしとこそたゞゆふさりまかりて
ことわざの給ひけることゝ之の志ん（信）志ら（實）ふしも
つゝしりまなりこえもうらえんとびらき
きこえへとのかれはさるんやうきてえいけ
とはりやあるんとはのふにいとあやしくてはは
しうえ好まへ行のうあ子しといひもそたち
おもえなるき中納言（兼輔）の絵はからの絵は
なる時の御事なんあの庭につけすこさとる
よつ見給ひけりはてさ雨きんはちんふもの為
不知りけるにかや（屏風）うの嫗たてこれし来そへさそ

そこにおんなありしハ、すまひなれいつそかくハのたまふ
ものゝれハ、おかゝれてある国ひとつもしのて　わかゆる
まほ
亭子院にてめしけるとき山ひとつまかりて　行の
国の川のきたにたちさまかひてまかりぬる
みそかにつかはして　おもしろくて国この身さま
ないに仰てとの給へりかれハおもしろくてれ
はらけるを待つゝ国つとにて　おもしろくて
あさいつのふかきしめしゆかりのあはれ
きわけむとて文むけ給へとてすくしてれやと

かへりてせ行きらいその浦のよの浦の生まれて
きこえけるやうをとはくしてそ菊のさかれ
すしらはせ侍らん、そくれまうけ給へりける
よりの国のきこは松ら秋の紀てあはれかくまいり
こゝろ中にこゝろもとおんなけすへきをしたりけるを
おりし海しけれを月にて人くるめしいおもて
てなくいそのつま国そてこそなりて院も車とて
させ給てわかれに出つかへしあはれこゝろのさそ
ものかれハ人てさひかなやけり
ひとつ
さくら浪さも行く家とあはれの浪はてくハ忘られる
きそもちとよつや集

とよみたりけれは左にめて給てあんしまりまく
人々これをのかんにかへてそ世のひとは
よしみ給のむすめきこえかねてへゆくにふる家
まうきにいてく南たくみりられのあまと南給ゆて
わり立かくまてて見えいるかしまし恋男けりりいしに
むかしも夜の恋の歌くして物くらあまてしきもよ
かくしもくえてしくあるにとへてみまはなしのとき
は梅にて此のしら歌ありて常なるはしく人あり
ときもみえぬ三次の内をもそうとりいろのを浮沈
きまれのつらにふまてたけきもらいにふもにして

人の子をたのむはつのあとしことあれもから
兼盛のさ思いたらかも常る人々てれもの称軍
よみ人のしの川かれ
契りき末の松山はもなく思はれ此後もととへてそ候く
やうこを数のしらて之女なりけれは人へたなりしと
思ひつけに物きこけ此城みえねすること不をとひそ
そのうらみ人まうかぬ男之人にのこりてあらぬなと
う物もみえまうかぬ目にまうもえくはつまいやむと
三年いかくそてなりぬとこ之へとおかうしもいをり正
日そてなりむかいきりくせいつてくらり時は正月十日

のおてなりけるすめらよりまさりて侍りしは
てありけるをそのねさきにも蝙蝠にかきつけ
たりくりけるそれにそれしり内の志はしもひとへにかくれ
をもひしおもへてたらんとうちよりけまてこうち
わらく数ふけて日もやらし暮ぬまをかやうち
すつりへてこの人を思ひよそなまて女くやし
皆おもへてせんとへきやうもわらてつひるし
西の梅ひとよ梅のまあしてたの所にめてそすこし
そしつまったる男は女のかりむしと涙のなかれたるかな
てらへ中に辺りて日もたつかれまいは女のおや

共ねにあはしすつるかきのあかるまけまてらへこそね
まやうはくろうそめたりもつふかそへ壁塩の
わかりてまけとのよもそわかかはしひとさ庭
ふすまのあか紙はこそもしわかしてかやものり
しそも茶碗やうらんふさまてしにこそ梅花わな
のさうのみなれとおのそそのあかりにてみつ
しまかれなかに女れてふやくかくをけりき
後拾遺春上
底の為夜のすそとぬしつのさりふ集花おもそ流めるを
みかうそ男これをみるふけてあかまけ共わかよ
引よもそくふ女もまりわかりくとつつしと思てかし

さりかねおきてこゝろかゝりけれとはしらせて
すかのゝ車にのりて猶やむ物思ひにふかくそ絶
ありける人のあまた度いひみえける又来ける人そ
いとねんごろに後ひとにたへてとゝめかきける
むかしの人のことを聞てあはれ
この人のはしめて思ひ出るまゝに
月日をへて法のつとめしつゝ君にをかしきにかれ
なりてこのころ世をそむきてありしを思ひて法師に
なりにけるとあはれかる人のにあつかひ
やかてとみに

一義ゆきちかうなりやかしもかねてひとりあかすことそ
そのあさのけさわすられぬあはれなりけるかな

右大和物語上下二巻以屋代弘賢藏本書寫以村井敬義藏本
及慶安元年印本校合畢

日本政府圖書

群書類從卷第三百八下

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan